

第一章…湯けむりの向こう、あふれる想いと柔らかな重み

宿の入り口にかかった藍染めの暖簾をくぐると、ふわりと濃厚な硫黄の香りが鼻先を掠めた。手入れの行き届いた石畳の廊下には静寂が満ちていて、どこからか鹿威しの「カコン」という乾いた音が、一定のリズムで響いている。長い旅路の果て、人里離れた山間にひっそりと佇むこの温泉宿は、俺たちが求めていた「隠れ家」そのものだった。

「……やっと、着きましたね」

隣から聞こえたのは、鈴を転がしたような、けれどどこか深い安堵を含んだ静かな声だった。振り返ると、そこにはフェルンが佇んでいる。旅の汚れや寒さを防ぐための分厚く大きなローブを身にまとっていても、その整った白磁のような顔立ちと、紫がかかった紺色の瞳の美しさは隠しきれない。少しだけ乱れた長い髪を指先で耳にかけ、彼女は小さな息を吐いた。

「疲れたか？」



視線だけで問いかけると、フェルンはいつものように表情をあまり崩さず、けれどほんの少しだけ口角を緩め、潤んだ瞳でこちらを見つめ返してきた。

「……少しだけ。でも、大丈夫です。ここからは、誰にも邪魔されませんから」

その言葉の響きに、心臓がトクンと大きく跳ねる。そう、今回の旅は特別だ。フリーレン様もシユタルクもない。いつもなら誰かの世話を焼いたり、あるいは魔物退治に追われたりしている彼女を、今夜は俺が独り占めできる。フェルンもそれを強く意識しているのか、いつもより俺との距離が近い気がする。歩くたび、分厚いローブの袖同士が触れ合う距離。そのわずかな接触だけで、互いの体温を探り合っているようだった。

女将に案内されたのは、離れにある特別室だった。広々とした和室はほのかに畳の香りが漂い、奥には現代風の低いベッドが設えられている。そして掃き出し窓の向こうには、専用の露天風呂から立ち上る白い湯気が、月明かりに照らされて揺らめいていた。

「荷物、置きますね」

フェルンはそう言うと、肩にかけていた靴を畳の上に置いた。重厚なローブをまとった立ち姿。その何重もの布地の内側に、いかに暴力的で、かつ神秘的なまでの肢体が隠されているか。それを知っているのは、今この世界で俺だけだという背徳感が、期待を膨らませる。

「……ん」

フェルンが小さく唸り、凝り固まった肩を回す。その何気ない動作の拍子に、だぼっとしたローブの生地が内側から強く引っ張られた。胸元に生まれる、信じたほどの「張り」。布越してすら主張してくる圧倒的な質量が、重力に従って大きく形を変える。

「……どうかされましたか？ そんなに、じっと見て」

視線に気づいたフェルンが、ジト目でこちらを見上げる。咎めるような口調だが、その頬は朱に染まり、瞳は甘く濡れている。これは彼女なりの照れ隠しであり、誘い文句だ。



「綺麗なものを、見ていただけだ」

「……口が上手い」

ぶい、と顔を背けるフェルンだが、その耳先まで赤くなっているのが見て取れた。彼女は俺に背を向け、着ていたローブのボタンに手をかけた。

「とりあえず、お茶でも淹れましょうか。それとも……」

言葉を切り、彼女はゆっくりと振り返る。上目遣いで俺を捕らえるその瞳には、普段の冷静な魔法使いの姿はなく、ただ愛を乞う一人の少女の色が浮かんでいた。

「……先にお風呂に入りますか？ それとも、浴衣に着替えて……少し休みますか？」

「着替えよう。浴衣があるみたいだし、まずは楽な格好になるといい」



「わかりました。……背中、向けていてくださいね」

「今更か？」

「……今更でも、恥ずかしいものは恥ずかしいんです」

フェルンは唇を尖らせて、むすつとした表情を作る。だが、その声色は拒絶ではなく、むしろ恥じらいを楽しむような響きを含んでいた。俺は素直に従い、窓の方へと身体を向けた。背後で、衣擦れの音が部屋に響く。厚手のローブが床に落ちる重たい音。シユルリ、とインナーの紐を解く音。パサリ、とスカートが滑り落ちる音。視覚を遮断された分、聴覚が研ぎ澄まされ、それら全ての音が脳内で鮮明な映像となって再生される。白い肌が露わになり、柔らかな肉が解放される様を想像するだけで、喉が渴いた。

「……んっ、これ……少し、きついかもしれません」

背後から、困ったような、それでいて少し艶っぽい呟きが聞こえた。

「……振り返って、よろしいですよ」

許可が出たので、ゆっくりと振り返る。そして、俺は息を呑んだ。

そこにいたのは、宿の浴衣を身にまとったフェルンだった。丈は合っている。だが、上半身——特に胸元が、異常な事態になっていた。薄手の浴衣生地が、彼女の豊満すぎる双丘を収めきれず、パンパンに張り詰めているのだ。合わせ目が必死に抵抗しているものの、その隙間からは深い谷間が露わになり、雪のような白肌が覗いている。帯をきつく締めたことで、その上の膨らみが強調され、まるで二つの巨大な果実が盆の上に乗っているかのような迫力があつた。

「……特大サイズを用意していただいたはずなんですけど、やっぱり……胸が苦しいです」

フェルンは自分の胸元を見下ろし、帯の上に乗った肉を手で持ち上げるようにして直

しながら、不満そうに呟いた。

「……変、ですか？」

「いや、とても似合ってる。……目のやり場に困るくらいにな」

「……噓つき。変な目で見てるくせに」

フェルンは一步、俺に近づいてくる。畳を踏む足音が消され、代わりに彼女特有の、陽だまりのような甘い匂いが鼻腔をくすぐった。浴衣の袖から伸びる白い腕が、俺の服の裾をぎゅつと掴む。

「……でも、嫌いじゃないんでしょう？……こういうの」

俺は彼女の手を取り、引き寄せる。フェルンは抵抗することなく、むしろ自ら飛び込むようにして、俺の胸にその柔らかな身体を預けてきた。

「……………」

密着した瞬間、思考が吹き飛んだ。柔らかい、なんてものではない。液体のように形を変え、俺の胸板に吸い付くような、圧倒的な弾力と質量。温かく、重く、そして甘い。

「……………ずっと、こうしたかった」

消え入りそうな声で、フェルンが胸元で呟いた。

「旅の間は、皆様もいらっしやって……………なかなか、二人きりになれなかったから」

「そうだな。俺もずっと、こうなりたかった」

俺の手が、自然と彼女の背中に回る。華奢な背中と、相反する豊かな前面。そのアンバランスさが、彼女の魅力だ。フェルンは俺の胸に顔を埋めたまま、小さく声を上げた。

「……名前、呼ばないでください。……恥ずかしいから」

「じゃあ、どうすればいい？」

「……呼ばなくていいです。ただ、こうしていて」

フェルンはさらに強く俺に体を押し付けてくる。そして、顔を上げ、潤んだ瞳で俺をじつと見つめた。その瞳孔が開いているのがわかる。

「……触って」

「え？」

「……だから、触ってください。……私のこと」



彼女はそう言いながら、俺の手を強引に取り、自分の胸へと導いた。浴衣の合わせ目の上、今にも弾け飛びそうなその場所に、俺の手のひらが触れる。

ドクン、ドクン、ドクン。彼女の心臓の音が、手のひらを通して、痛いほど鮮明に伝わってきた。早鐘を打つ鼓動は、彼女の興奮を雄弁に物語っている。

「……重たいですか？」

不安そうに、けれど期待を込めて尋ねるフェルン。

「いや、心地いい重さだ。……フェルンの全部を感じる」

「……馬鹿」

フェルンは再び俺の胸に顔を埋めた。だが、その体は熱く、微かに震えている。吐き出される息が、俺の鎖骨あたりを熱く湿らせていく。

「……温泉、入る前に……少しだけ、充電させてください」

そう言って、フェルンはつま先立ちになり、俺の首に腕を回して唇を求めてきた。静寂な部屋に、衣擦れの音と、互いの熱っぽい吐息だけが響き渡る。長い夜の、幕開けだった。

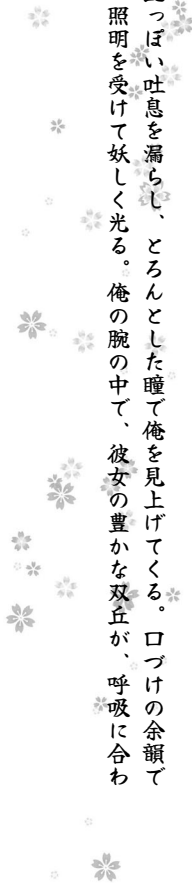
—————

第二章…湯けむりの誘惑、解き放たれた柔らかな誇り

唇が離れても、熱は冷めるところか、いや増すばかりだった。部屋の空気は、俺たちの発する熱気とフェロモンで、むせ返るほどに満たされている。

「……ん、はあ……」

フェルンが艶っぽい吐息を漏らし、とろんとした瞳で俺を見上げてくる。口づけの余韻で濡れた唇が、照明を受けて妖しく光る。俺の腕の中で、彼女の豊かな双丘が、呼吸に合わ



せて大きく波打つ。浴衣の合わせ目は先ほどの抱擁で限界を超え、もはや胸の半分以上が露わになり、深い谷間が誘うように口を開けていた。

俺の視線がそこに釘付けになっているのに気づいたのか、フェルンはすぐに「ふふっ」と妖艶に微笑んだ。

「……そんなに、見たいですか？」

甘えたような、それでいて挑発するような声色。彼女は俺の腕からすると抜け出すと、一歩下がって自身の胸元に手を添えた。そして、わざとらしく浴衣の襟をさらに左右へ広げてみせる。

「……んっ。ほら、どう？」

白い巨大な果実が「たゆんっ」と弾け出し、その全貌を現す。血管がうつすらと透けるほどの白磁の肌。その先端には、淡い桜色の蕾がちよこんと鎮座している。

「すごいな……また大きくなったんじゃないか？」

俺が正直な感想を漏らすと、フェルンは満足げに頷き、小首を傾げた。

「……ん。そうかもしれませんが。最近、ローブの前が閉まらなくなってきて……少し困って
いたんです」

言葉とは裏腹に、彼女の表情に困惑はない。あるのは、自身の女としての武器に対する絶
対的な自信。

「……でも、こうして見てくださるなら、悪くないかなって」

フェルンは自分の胸を下から両手で持ち上げ、ふにふにと揉んで見せた。自分の指が肉に
沈み込み、溢れ出す様子を、俺に見せつけるように。



「……この重たいの、お好きでしょ？ ……知っていますよ」

彼女は自分の価値を完全に理解している。俺がこの豊満な肉体にどれほど執着し、どれほど狂わされているかを。

「……お風呂、行きましょう。……もう、待ちきれません」

フェルンが俺の手を取り、露天風呂への扉へと導く。その手は熱く、汗ばんでいた。

—————

ガラス戸を開けると、ひんやりとした夜風と、濃厚な硫黄の香りが流れ込んできた。石造りの露天風呂からはもうもうと湯気が立ち上り、水面が月明かりを反射して揺らめいている。高い扉に囲まれたそこは、世界から切り離された、完全に二人だけの空間だ。

脱衣スペースの籠の前で、フェルンが立ち止まる。



「……脱ぎますね」

短い宣言と共に、彼女は浴衣の帯に手をかけ、ゆっくりと解いた。シユル……という音と共に帯が落ちる。浴衣が完全に開き、白い肌が夜闇に浮かび上がった。彼女は躊躇うことなく、それを肩から滑り落とす。

バサリ。布が床に落ちると同時に、拘束を解かれた二つの巨大な塊が、重力に従って「ブルンッ」と大きく暴れた。

「……ふう。やっと、楽になりました」

フェルンは解放感に小さく息を吐き、わざと俺に見せつけるように胸を反らせた。豊かな膨らみが揺れ動き、その質量を誇示する。冷たい夜気に触れ、先端の愛らしい突起がキュッと縮こまり、ツンと上を向くのが見えた。



「……見てください。お湯に入る前なのに……もう、こんなになってる」

彼女は自分の人差し指で、敏感になっている先端をツンツンと弾いた。

「……んっ、あ……」

自らの刺激に、甘い声が漏れる。恥じらいなどどうに捨て去り、今の彼女は、ただ快楽を貪欲に求める一人の女だった。

「……早く、いらっしやい。……温めて」

フェルンは俺を振り返り、白いお尻を揺らしながら、先に湯船へと足を踏み入れた。

ちゃぼん、と音がして、お湯が溢れ出す。湯面にぶかりと浮かぶ彼女の胸は、まるで二つの白い島のような。



俺も慌てて服を脱ぎ捨て、冷気で肌が粟立つのを感じながら、彼女の後を追って湯船に浸かった。熱い湯が体を包み込む。俺は湯の中を移動し、彼女の隣に腰を下ろした。肌と肌が触れ合う。お湯という媒体を通して、彼女の体温の高さ、肌の滑らかさが伝わってくるようだ。

「……ん、温かい」

フェルンが俺の肩に頭を預けてくる。水中では、彼女の豊かな胸が浮力で形を変え、俺の腕に柔らかく押し当てられている。

「……ねえ」

耳元で、濡れた声が囁いた。湿気を含んだ吐息が、鼓膜を直接撫でる。

「……さつき、触りたいって……言っていましたよね？」



彼女が俺の手を取り、湯の中へと沈めていく。導かれた先は、もちろん、たゆたう二つの果実だ。

「……………んっ！……………あ……………」

俺の手のひらがその頂に触れた瞬間、フェルンが背中を反らせ、短く喘いだ。俺は彼女の意図を汲み取り、その巨大な質量を両手で包み込んだ。お湯の中で揉む感触は、空気中とはまた違う。ぬるりとした湯の抵抗と、吸い付くような肌の感触。指が沈み込むほどの柔らかさが、俺の理性を完全に焼き切ろうとしている。

「……………はあ、んっ……………ふふ、すごい顔をしていますよ」

フェルンは俺の反応を楽しんでいるようだ。彼女は俺の首に腕を回し、さらに密着してくる。濡れた髪が俺の頬に張り付き、甘い香りが鼻孔を満たす。

「……………もつと、いいですよ……………好きなように、してください」

許しを得た俺は、遠慮なくその豊富な肉体を愛する。手のひら全体で包み込み、持ち上げ、ゆっくりと円を描くように揉みしだく。親指の腹で、硬くなった突起を優しく、時に強く擦る。

「……………んあつ！……………そこ、だめ……………んんっ！」

刺激が強すぎたのか、フェルンがビクンと体を震わせ、お湯を跳ねさせながら俺にしがみついていた。

「……………嘘、だめじゃない。……………もつと、してください。……………いじめて」

彼女の吐息が、俺の首筋にかかる。熱い。俺はさらに力を込め、その圧倒的な重量感を堪能するように、深く、激しく揉みしだいた。形を変え、指の間から溢れ出る白肉。視覚的にも触覚的にも、暴力的なまでのエロスがそこにあった。



「……はあ、はあ……んっ、気持ちいい……手が、熱い……」

フェルンの理性が、湯けむりの中で溶けていくのがわかる。彼女の瞳はとろんと濁り、口元からは銀色の糸が垂れている。

「……ねえ、知っていますか？」

フェルンが潤んだ瞳で俺を見つめ、とろけるような声で言った。

「……これ、魔法で大きくしているわけじゃないんですよ？……全部、本物。……私の、全部です」

自分の胸を誇らしげに押し付けながら、彼女は俺の耳元で囁く。

「……んっ、はあ……！……もう、我慢できません……」



フェルンの呼吸が荒くなる。彼女は俺の手を自分の胸から離すと、今度は下腹部へと導いていった。湯の中で、硬直した俺の分身を、彼女の細い指が握りしめる。

「……ここじゃ、狭いですね」

「……部屋に、戻りましょうか？ ……続きは、お布団の中で」

湯気の中で微笑む彼女の顔は、俺を深く深く墮落させる引力を持っていた。俺たちは絡み合うようにして湯船から上がり、濡れた体のまま、雫を滴らせて再び部屋へと向かった。

—————

第三章…白磁の峡谷、甘美なる嚙下

ベッドに押し倒された背中が、シーツの冷たさとスプリングの感触を感じる。けれど、体の前面にのしかかる熱と重量感は、そんな感覚を瞬時に吹き飛ばすほど圧倒的だった。



「……………ん、はあ……………。逃げられないですよ」

フェルンが俺の上に跨り、勝ち誇ったような笑みを浮かべている。濡れた髪がカーテンのように垂れ下がり、その隙間から覗く瞳は、欲情でとろりと潤んでいた。そして何より、目の前にある光景。重力に従って垂れ下がる二つの巨大な乳房が、俺の顔のすぐ目の前でゆらゆらと揺れている。先端の愛らしい突起は、興奮と外気への反応でカチカチに尖り、俺の鼻先を掠めるほどの距離にあった。

「……………さつき、お風呂で揉んでくださった時……………すごく、大きくなった気がした」

彼女はそう言うと、自らの手でその豊かな胸を鷲掴みにした。むにゅっ、と指が白い肉に沈み込み、溢れ出した肉が形を変える。

「……………見てください。貴方のせいで、こんなにいやらしくなっちゃった」

フェルンは腰をゆつくりと落とし、俺の下半身へと狙いを定めた。そこにそそり立つ俺の

昂ぶりを、彼女自慢の峡谷で捕獲しようとしているのだ。

「……………んっ……………よい、しょ……………」

ねっとりとした眩きと共に、彼女の胸が俺自身を飲み込んでいく。柔らかいなんてものではない。まるで最高級のシルクとマシユマロを混ぜ合わせ、人肌の熱で溶かしたような感触。左右から迫る巨大な肉壁が、俺の剛直を完全に包み込み、視界から消し去った。

「……………ふふっ、消えちゃった」

フェルンがクスクスと笑う。

「……………貴方のあれ、結構大きいのに……………私の胸だと、全部隠れちゃうんですね」

彼女はそれが誇らしくてたまらないといった様子で、わざと胸を寄せ、さらに圧迫を強めてきた。四方八方から締め付けられる、苦しいほどの圧迫感。だが、それは至上の快樂だ。

「…………どうです？ 私のおっぱい、気持ちいいですか？」

「ああ…………最高だ。きつくて、熱くて…………」

「…………ん、素直でよろしい」

フェルンは満足げに頷くと、腰を前後に揺すり始めた。ずぶ、ずぶ、という卑猥な音が、肉と肉の隙間から響いてくる。彼女の胸はあまりにも大きすぎて、単に挟んでいるというよりは、胸そのもので犯しているといった方が正しい。

「…………はあ、んっ…………！ 私も、ここ…………擦れて、気持ちいい…………っ」

先端の敏感な部分が、俺のモノと擦れ合い、フェルン自身にも快楽を与えているようだ。彼女は目を細め、口を半開きにして、荒い息を吐き出しながら腰の動きを速めていく。



「…………んあつ、あつ、はあ……………！…………貴方のが、硬い……………っ、私の胸、ぐちゃぐちゃにせ
れてる……………っ」

巨大な果実が波打ち、俺の視界を埋め尽くす。彼女の汗と、風呂上がりの湿り気が潤滑油
となり、摩擦はどこまでも滑らかで、それについて吸い付くように濃厚だ。

「…………ねえ、お好きでしょ？ 私の、この大きな胸……………」

フェルンは俺の顔を覗き込み、挑発するように囁く。

「…………フリーレン様にはできないこと、私がたくさんしてあげます。…………このお肉で、貴方
をぜんぶ溶かしてあげますから」

嫉妬とも独占欲とも取れる言葉。それが俺の興奮をさらに煽る。

「…………ん、はあ……………っ、そろそろ……………」



バイズリによる刺激が限界に近づきそうになった頃、フェルンは動きを止めた。名残惜しように胸を開くと、そこには赤く充血し、彼女の愛液と汗でべとべとに光る俺の分身が現れた。

「……ふふ、すごいことになっていますね」

フェルンは目を輝かせ、唇をべろりと舐めた。その仕草は、獲物を前にした捕食者のそれだ。

「……綺麗にしてあげますね」

彼女は身を屈め、その熱い呼吸を俺の先端に吹きかけた。ぞくり、と腰が跳ねる。

「……んっ、ちゅ……」



ついに、彼女の柔らかな唇が先端を捉えた。最初は挨拶代わりのキス。そして次の瞬間、じゅるり、という湿った音と共に、亀頭が彼女の口内へと招き入れられた。

「……………んむ、んっ……………ちゅぶ……………」

熱い。胸とはまた違う、粘膜特有の熱さと吸着感。フェルンの舌が、まるで熟れた果実を味わうかのように、裏筋を執拗に舐め上げ、カリの部分を転がす。

「……………じゅっ、じゅるっ……………んっ……………」

彼女は上目遣いで俺を見つめながら、頭を上下させ始めた。紫紺の瞳が、快楽に歪む俺の顔をじっと観察している。頬がこけ、喉が鳴るほど強く吸い付かれるたびに、脳髓が痺れるような感覚が走る。

「……………ぶはっ。……………ん、味……………濃いかもかもしれません」



一度口を離し、銀色の糸を引きながら彼女が呟く。だが、その表情に嫌悪感はない。むしろ、もっと味わいたいという渴望が見て取れた。

「……もっと、奥まで……よろしいですか？」

彼女は返事を待たずに、再び俺のモノを咥え込んだ。今度は深く。喉の奥まで。

「……んぐつ、おっ……ふ……っ！」

喉の奥を突かれる苦しさに、彼女の瞳が少し潤む。それでもフェルンは止まらない。むしろ、その異物感を楽しんでいるかのように、喉を鳴らして飲み込もうとしてくる。生真面目な彼女が、俺のためだけにこんなにも淫らな奉仕をしてきている。その事実が、物理的な刺激以上の興奮をもたらした。

「……んーっ！……んんっ……っ！」



鼻がかかった甘い喘ぎ声が、バイブレーションのように俺の剛直に伝わってくる。口腔内の狭さ、舌の動き、そして喉の締め付け。すべてが完璧なりズムで俺を追い詰めていく。

「…………フェルン、もう…………出る…………!!」

俺が警告すると、彼女は口を離すどころか、さらに深く啜え込み、舌を激しく絡ませてきた。その瞳が語っている。『出して』と。

限界を超えた瞬間、俺の腰が大きく跳ねた。

「…………んぐっ!!」

フェルンの喉の奥に、熱い白濁が勢いよく放たれる。ドクンドクンと脈打ったたびに、彼女の喉がゴクリ、ゴクリと上下するのが見えた。

通常なら吐き出してもおかしくない量と勢い。だが、フェルンは俺の腰をしっかりと掴み、

一滴も逃さないという強い意志で、口を密着させ続けていた。

「……………んっ、んぐ……………ごくっ……………」

長い射精が終わり、俺の体が力を失ってシートに沈む。フェルンはゆつくりと口を離した。プハッ、と息を吐き出す彼女の口元は、白く汚れている……………かと思いきや、綺麗に舐め取られていた。

「……………んっ、んく……………」

最後に喉を大きく鳴らし、すべてを胃の中へと収める。いわゆる「ごくくん」の音。それが妙に生々しく、静かな部屋に響き渡った。

フェルンは口元を手の甲で拭うと、とろんとした恍惚の表情で俺を見下ろした。

「……………ん、美味しかった」



その一言の破壊力。彼女は俺の胸板に手を置き、顔を近づけてくる。まだ口の中に残る、俺自身の味と、彼女の唾液の匂いが混じり合う。

「……全部、飲みましたよ。貴方の魔力も、命も、全部」

彼女は妖艶に微笑み、俺の唇に軽いキスを落とした。

「……これで、貴方はもう私のものです。……絶対、離してあげません」

その言葉は、まるで強力な拘束魔法のように俺の心を縛り付けた。浴衣は完全にはだけ、露わになった豊かな肢体。そして、俺を受け入れ、飲み干してくれた唇。フェルンという少女の、底知れない愛と性欲の深淵を覗いた気がした。

「……でも、まだ足りないかも」



フェルンが悪戯っぽく囁く。

「……少し休んだら、次はあなたがしてくれますか？ ……私のここ、もうぐちゃぐちゃですから」

彼女の手が、自身の秘所へと伸びる。指先が濡れた花卉に触れ、クチュリと音を立てた。長い夜は、まだ始まったばかりだった。

第四章.. 聖母の甘い蜜、白濁に濡れる溪谷

「……んっ、んう……。……よしよし、いい子ですね」

俺は今、フェルンの柔らかな腕の中に抱かれ、その規格外に巨大な胸に顔を埋められている。視界は白い肌色一色。鼻腔は彼女特有の、ミルクと花が混じったような甘い匂いで満たされている。全身を労るように、フェルンは俺の頭を自身の胸にぐいぐいと押し付けていた。



「……私の全部を飲ませてあげましたから、今度は……飲んでいただく番です」

頭上から降ってくる声は、慈愛に満ちているようであり、どこか抗えない支配的な響きを含んでいる。彼女の手が俺の頭を優しく、けれど力強く撫で、さらに深く、その双丘の谷間へと誘導する。

「……ほら、パクツとしてください。……赤ちゃんみたいに、甘えていいですから」

目の前にあるのは、興奮で充血し、桜色に熟した愛らしい突起。俺は本能に従い、その先端を口に含んだ。

「……んっ、あ……！……そ、う……上手……」

舌先で転がし、唇で挟んで強く吸い上げると、フェルンの身体がビクリと大きく跳ねた。まるで本当に母乳が滲み出てくるのではないかと錯覚するほど、彼女の胸は温かく、張り詰めた、生命力に満ちている。



「……ちゅ、ぶ……んんっ……」

吸い付くたびに、巨大な乳房が「たぶん、たぶん」と重々しく揺れ、俺の頬や鼻を打つ。その暴力的なまでの柔らかさと重量感が、俺を幼児退行させていくようだ。

「……はあ、んっ……。可愛い……。……必死に私のおっぱい、吸ってる……」

フェルンは恍惚とした表情で、俺の吸引を受け入れている。彼女の指が俺の髪を梳き、時に快楽に耐えるように強く鷲掴みにする。

「……もつと、強く……。……私のおっぱいがなくなるくらい、吸い尽くしてください……っ」

俺は反対側の胸も手で揉みしだきながら、一心不乱に舌を動かした。乳輪の周りを舐め、先端を甘噛みし、真空になるほど強く吸い上げる。



「……………ひぐつ！ ああ、んっ！ ……すごい、吸う力……………つ、脳みそまで、痺れる……………っ」

フェルンの喘ぎ声が一段と高くなる。母性本能と性欲が混ざり合い、彼女の中で何かが壊れていく音が聞こえるようだ。彼女は自分の胸を両手で持ち上げ、さらに俺の口の奥へと押し込んでくる。まるで、自分自身を俺に食べさせようとするかのように。

—————

「……………ん、はあ……………。……………あれ？ ……また、元気になっていますね」

ふと、フェルンが口元を緩め、熱い吐息混じりに俺の耳元で囁いた。彼女の母性的な「授乳」プレイと、その無防備な痴態が、俺の回復力を異常なまでに高めていたのだ。一度果てたはずの剛直が、再び硬く脈打ち始めている。

「……………ふふ、やっぱり……………私のことが大好きなんですね」



フェルンは嬉しそうに微笑むと、俺を仰向けに寝かせた。そして、濡れた髪をかき上げながら、その上に覆いかぶさってくる。目の前に、唾液で濡れ光る二つの果実がぶら下がっている。

「……挿れたいですか？」

彼女が意地悪く尋ねる。俺が頷こうとすると、彼女は人差し指で俺の唇を制した。

「……だめです。まだ、あげません」

「えっ、なんでだ？ もう限界だぞ」

「……だって、これがこんなに元気になったのは、私のおっぱいのおかげでしょう？ ……なら、この子（胸）に、お礼をするのが筋だと思います」

フェルンはそう言うと、俺の剛直を再びその深い谷間へと招き入れた。だが、今回は先ほど

とは違う。彼女はたつぷりと自身の唾液を胸に塗りたくり、さらに俺のモノにも「ふうーっ」と熱い吐息を吹きかけ、ヌルヌルの状態を作り出したのだ。

「……………んっ、しょ……………。挟みますね」

むにゅうッ。

強烈な圧迫感。先ほどよりもさらに重く、深く、そして熱い。彼女は体重のすべてを胸に乗せ、俺のモノを押し潰すように、形が変わるほど強く包み込んだ。

「……………ん、あ……………っ。滑ります……………すごい、ぬるぬる……………」

フェルンが腰を動かすたびに、濡れた皮膚と皮膚が擦れ合い、部屋中に「クチュ、クチュ、パンッ」という卑猥な水音が響き渡る。彼女の胸は、まるで生き物のように俺のモノに吸い付き、締め上げてくる。



「……はあ、はあ……っ！……気持ちいいですか？……私のおっぱいで、いかされるの……好き？」

「ああっ、最高だフェルン……！きつい、凄くいい……！」

「……んっ、知っています……！……おっぱい星人なことくらい……っ！」

フェルンの動きが激しさを増す。上下運動だけでなく、円を描くように、そして時折ぎゅつと力を込めて搾り取るように。

「……んあっ、あっ、はあ……！……私も、これ……乳首、擦れて……っ、気持ちいいんです……っ！」

彼女自身の先端も、俺の硬さと擦れ合い、快楽のスイッチが入っているようだ。フェルンは白目を剥きそうなほど陶醉し、よだれを垂らしながら腰を振り続ける。



「…………出るっ、フェルン…………っ！」

「…………いいですよ。…………出してください。私のおっぱいに、思いつきり…………っ！」

彼女は動きを止めない。むしろ、最後の追い込みとばかりに、胸の筋肉に力を入れ、俺のモノを限界まで締め上げた。逃げ場のない肉の牢獄。

「…………ん…………っ！」

「いくぞっ！！」

ドクンッ！！

俺の腰が跳ね上がり、二度目の限界を迎えた。白濁した熱い液体が、勢いよく噴き出し、彼女の胸の谷間へ、そして美しい白磁の肌へと飛び散る。



「…………んあつ！…………あ、熱い…………っ！」

フェルンは逃げることなく、俺が放つすべてを受け止めた。ドクドクと脈打ったびに、白い飛沫が彼女の顔や首筋にまで跳ねる。美しい谷間が白く濁り、清廉な魔法使いが、俺の色に染まっっていく。

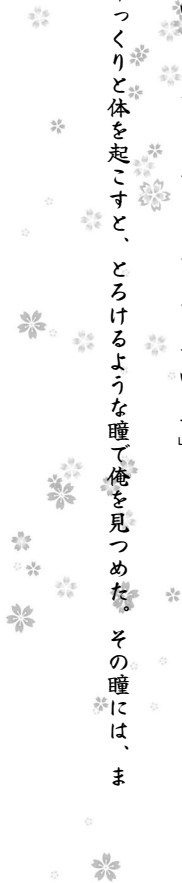
—————

「…………はあ、はあ…………。…………んっ、いっぱい出ましたね」

すべての脈動が収まると、フェルンは荒い息を整えながら、自身の胸を見下ろした。白く汚れた胸元。彼女は指先でそれを掏い取ると、ペロリと舐める。

「…………ん、濃い…………さつきより、ドロドロしています」

フェルンはゆっくりと体を起こすと、とろけるような瞳で俺を見つめた。その瞳には、ま



だ消えていない炎が宿っている。

「……すつきり、しましたか？」

「ああ……でも、フェルンは？」

「……私は、まだ。……全然、足りません」

彼女の声色が、一段低くなる。そこに含まれるのは、粘着質な情欲と、深い独占欲。

「……自分だけ気持ちよくなって、ずるいです」

フェルンは俺の体の上に跨ったまま、ゆっくりと腰を浮かせた。そして、自身の秘所を、まだ半勃ち状態で濡れている俺のモノの先端に押し当てる。

「……ここ。……もう、ぐしょぐしょなんです」



彼女が腰を擦り付けると、ヌルリとした感触が伝わってきた。そこは既に蜜で溢れ、俺を受け入れる準備が完全に整っていることを告げている。

「……………ねえ。……………今度は、本当に……………繋がってください」

彼女の瞳が潤み、懇願するように揺れる。

「……………お母さんごっちは、もうおしまい」

フェルンは俺のモノを右手で掴み、自身の濡れそぼった入り口へとあてがった。先端が、熱く湿った肉の割れ目に触れる。

「……………これからは、メスとしての私を……………たっぷりと、愛してください」

彼女が腰を沈めようとする。その瞬間、張り詰めていた空気が弾け、本能だけが支配する

時間が訪れようとしていた。

第五章…重なり合う鼓動、愛おしい熱の在処

「……………んっ、……………あ……………！ 入ります……………入っちゃう……………っ！」

フェルンがゆつくりと腰を沈めると、俺の楔（くさび）が彼女の濡れそぼった秘所へと、じわりと吸い込まれていった。きつい。なんて締め付けだ。彼女の愛液と俺の先走りが混ざり合い、ヌルヌルになっているはずなのに、その奥は驚くほど狭く、そして熱かった。まるで、俺の侵入を拒むと同時に、決して逃がさないと食らいついているようだ。

「……………ふうっ、……………うう……………っ。……………おっきい……………」

根元まで呑み込んだ瞬間、フェルンが上を向いて大きく喘いだ。その拍子に、彼女の豊かな胸がドスンと揺れ、汗ばんだ肌が照明の光を弾く。彼女の胎内は、俺の形を記憶するか

のように脈打ち、四方八方から押し寄せる肉の壁が俺の理性を削り取っていく。

「……全部、入りました。……どうですか？……私の中」

フェルンが涙目になりながら、俺を見下ろす。その表情は、苦悶と快楽が入り混じった、今まで見たこともないほど扇情的なものだった。

「熱いよ、フェルン。……溶かされそうだ」

「……ふふ。……溶けちゃえばいいのに。……そしたら、ずっと一緒ですから」

彼女は妖艶に微笑むと、俺の胸に手をつき、腰をゆっくりと動かし始めた。ズ、ズズツ……。幾重もの肉の襞（ひだ）が、俺のモノをねっとり絡め取りながら擦り上げる感覚。最奥を小突かれるたびに、フェルンが「んっ！」と小さく体を跳ねさせる。

「……あ……っ、そこ……！深い、の……っ！」



「フェルン、苦しくないか？」

「……ううん、平気……。……むしろ、もっと……。……貴方で、私をいっぱいにして……」

彼女の動きが徐々に大きくなる。上下運動に合わせて、あの巨大な乳房がバウンドし、まるで生き物のように暴れ回る。その視覚的な暴力と、結合部から伝わる快楽の相乗効果で、俺の脳内は真っ白になりかけていた。

「……んああっ！……あっ、あっ、あっ……！！」

部屋中に、卑猥な水音と肌がぶつかる音、そして二人の荒い呼吸音が響き渡る。最初は慎重だったフェルンの動きも、快楽が高まるにつれて激しさを増していった。彼女は自分の欲望に素直になり、食欲に快楽を求めて腰を振っている。

「……すごい、お腹の中であばれてる……っ！……私のここ、おかしくなりそう……っ！」

「俺もだ、フェルン……！ 最高に気持ちいい……！」

俺は彼女の腰を両手で掴み、その動きをサポートするように下から突き上げた。ガツンッ、ガツンッ。互いの恥骨がぶつかり合う音が、リズムを刻む。

「……ひあつ！……したから、突き上げないで……っ！……深いっ、奥に当たってるうっ！」

「嫌か？」

「……っ、嫌じゃない……！……好き、もっど……っ！……壊れるくらい、してくださいっ！」

普段は冷静沈着な彼女が、乱れ髪を振り乱し、よだれを垂らしながら快楽を貪っている。そのギャップが、俺をさらに狂わせる。俺は上半身を起こし、彼女の背中に手を回して抱き寄せた。



「……んっ、ちゅ……っ」

唇が重なる。舌と舌が絡み合い、唾液を交換する。下では激しく繋がりが合いながら、上では甘く口づけを交わす。彼女の巨大な胸が俺の胸板に押し潰され、二人の心臓の音が一つになったかのように錯覚した。

「……はあ、んっ……。……大好き。……だーいすき……」

キスの合間に、フェルンがうわごとのように呟く。

「……ねえ、わかりますか？……私がどれだけ、気持ちいいか……」

「ああ、伝わってるよ。中がすごい締め付けだ」

「……いじめるから……。……私のここ、離したくないって……。言ってるの……」

彼女の膣壁が、俺のモノをぎゅうぎゅうと締め付けてくる。これは意思によるものじゃない。彼女の本能が、俺の種を求めて収縮しているのだ。

「……もう、だめ……。……これ以上は、我慢できません……。っ」

フェルンの瞳が焦点を失いかげ、快楽の頂点が近いことを告げていた。俺も限界だった。彼女の極上の締め付けと、愛の言葉攻めに、もう爆發寸前だ。

「……フェルン、いくぞ……。中に、出す……。っ」

「……出してください！……。全部、私の深いところに……。ぶちまけて……。っ！」

彼女が俺にしがみつき、腰を密着させてくる。最奥での結合。逃げ場のない完全な密着。

「……っ、うおおおっ！！」



「……………んぎいいいいっ！！！」

ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ！！

俺の腰が大きく跳ね、熱い奔流が彼女の胎内へと勢いよく解き放たれた。一度、二度、三度。終わりのないような脈動が、俺の生命を彼女の中へと注ぎ込んでいく。

「……………ああっ、ああ……………っ！！……………熱いっ、入ってきてるう……………っ！！……………貴方の、どくどくしてるう……………っ！！！」

フェルンは背中をのけ反らせ、白目を剥きそうなほどの絶頂に達していた。彼女の子宮口がキュウキュウと収縮し、俺のモノを噛み、注がれた精を飲み干そうとしている。二人同時に訪れた、強烈なスパーク。視界がチカチカと点滅し、世界には俺たち二人しか存在しないような、圧倒的な浮遊感に包まれた。



長い、長い絶頂の余韻。俺のモノが収縮しても、フェルンは腰を下ろしたまま、俺の上から退こうとはしなかった。むしろ、逃がさないように内壁を締めている気さえする。

「……はあ、はあ……。……んう……。……」

フェルンが力の抜けた体で、俺の胸に倒れ込んでくる。汗で濡れた髪が頬に張り付き、体からは湯気が立ち上っている。俺は彼女の背中を優しく撫で、汗を拭ってやった。

「……フェルン、大丈夫か？」

「……ん……。……腰、抜けちゃいました」

彼女は俺の胸に顔を埋めたまま、くぐもった声で答える。



「……すごかったです。……頭、真っ白になっちゃいました」

「ああ、俺もだ。フェルンの中、最高だったよ」

俺の言葉に、フェルンは少しだけ顔を上げ、とろんとした瞳で微笑んだ。

「……私も。……一つになれて、すごく……すごく、幸せ」

彼女はそう言うと、俺の唇にチュツ、と音を立ててキスをした。一度では足りず、二度、三度。雨あられのような軽いキスが降り注ぐ。

「……ちゅ。……ねえ、まだ抜かないでくださいね」

「え？でも、もう……」

「……まだ、あたたかいから。……余韻を、もっと感じていたいの」



フェルンは腰を少し動かし、体内に残る俺の存在を確かめるようにした。その動きに、萎えかけていた俺のモノがピクリと反応する。

「……あれ？ ……もしかして、まだできますか？」

「……いや、さすがに少し休ませてくれ」

「……ふふ、冗談です。……今はただ、こうして抱きしめていて」

フェルンは満足そうに目を細め、再び俺の胸に頭を預けた。その重み。温もり。そして、彼女の心臓の音。全てが愛おしく、かけがえのないものに感じられた。

旅はまだ続く。明日になればまた、フリーレン様やシユタルクと合流し、騒がしくも楽しい日常が戻ってくるだろう。彼女もまた、生真面目な「お母さん」の顔に戻るのかもしれない。



けれど、今夜だけは。この温泉宿の、小さな部屋の中だけは。彼女は俺だけの、甘えん坊で、淫らで、最高に可愛い恋人だ。

「……愛してるよ、フェルン」

俺が囁くと、彼女は耳まで真っ赤にして、さらに強く抱きついてきた。

「……ん。……私も、愛しています。……私の、大好きな人」

窓の外では、いつの間にか月が高く昇っていた。湯けむりの向こうで交わされた熱い約束は、二人の絆をより一層強く、解けないものへと変えていた。心地よい疲労感の中、俺たちは重なり合ったまま、幸せな眠りへと落ちていった。

—————



エピソード…夜明けの残り香、衣の下の秘密
カーテンの隙間から差し込む朝の光が、瞼の裏を白く染める。けれど、俺はまだ目を開け
たくなかった。全身を包み込む気怠い疲労感と、それ以上に心地よい「重み」と「温もり」
を、もう少しだけ味わっていたかったからだ。

「……………、んう……………」

耳元で、規則正しい寝息が聞こえる。胸元には、ずっしりとした重量感。薄目を開けて見
下ろすと、そこにはフェルンが俺の胸に覆いかぶさるようにして眠っていた。昨晚、あれ
だけ乱れ、啼き、俺のすべてを飲み干した彼女は、今はまるで無防備な子供のような顔を
している。

ただ、その身体だけは隠しようもなく「女」だった。掛け布団は腰のあたりまで滑り落ち、
彼女の背中から腰にかけての滑らかな曲線が露わになっている。そして何より、俺の胸板
を枕にしている二つの巨大な果実。重力でひしゃげ、俺の肌に乗っかかりと吸い付くように
密着しているその感触は、朝から俺の理性を危険な領域へと引き戻そうとしていた。甘っ

たるい性愛の残り香が、布団の中に充満している。

「……ん……」

俺の鼓動が速くなったのが伝わったのか、フェルンが小さく身じろぎをした。長い睫毛が震え、ゆっくりと紫紺の瞳が開かれる。

「……おはようございます」

まだ夢見心地のような、とろんとした瞳。彼女は俺と目が合うと、ふにやりとだらしなく頬を緩めた。

「……ん、おはようございます。……まだ、朝早い？」

「ああ、まだ早いよ。……よく眠れたか？」



「……はい。……匂い、いっぱいです……安心したから」

フェルンはそう言うと、猫のように俺の首筋に顔を擦り付けてきた。鼻先で匂いを嗅ぎ、濡れた唇をちゅっ、と押し付ける。彼女の動きに合わせて、胸元の肉塊が俺の体の上でうねる。柔らかく、温かく、そして昨夜の情事を思い出させる生々しい弾力。

「……ねえ。……なんか、硬い」

フェルンが悪戯っぽい笑みを浮かべ、俺の下半身へと視線を落とした。朝の生理現象と、今の彼女の無防備なスキンシップ。俺の分身は、布団の下ですでにテントを張っていた。

「……昨日の夜、あんなに出したのに。……変態」

くすくすと笑いながら、彼女の手が布団の中に滑り込んでくる。ひんやりとした素手が直接、俺の熱を帯びたモノを掴んだ。



「…………んっ、フェルン…………」

「…………だめです。…………朝だからって、許しません」

彼女は俺の耳たぶを甘噛みしながら、布団の中で手を動かし始めた。上下にしごき、先端を親指で弄る。昨晚の余韻が残っているのか、彼女の手のひらは少し湿っていて、それが極上のローション代わりになっていた。

「…………んあ、んっ…………。…………私も、また…………うずいてきちゃった」

フェルンが自身の太ももを俺の足に絡ませる。そこにある秘所は、じわりと熱を持ち、すでに湿り気を帯びていた。

結局、俺たちは朝食の時間ギリギリまで、布団の中で愛し合うことになった。激しい運動

の後、二人でシャワーを浴び、ようやく身支度を整える。

フェルンは鏡の前で、いつもの白いインナーの上に、あの重厚なローブを羽織った。ボタンを留め、髪を整えると、そこにはいつもの「冷静沉着な魔法使い」の姿があった。さっきまで裸で俺に跨り、涎を垂らして喘いでいた姿が嘘のようだ。

「……変ですか？」

俺がじっと見ているのに気づき、フェルンが振り返る。

「いや、完璧だ。いつものフェルンだよ」

「……ふふ。そう見えますか？」

彼女は少しだけ距離を詰め、俺のローブの襟を直してくれた。その距離感は、旅の仲間としてのそれだ。だが、彼女の手が俺の胸元に触れた瞬間、ほんの一瞬だけ、指先が這うよ

うに俺の筋肉をなぞった。

「……このローブの下が、私の噛み跡だらけなのは……他の人には内緒ですよ」

小声で囁かれた言葉に、背筋がぞくりとする。そう、俺の体には昨晚彼女が付けたキスマークや噛み跡が無数に残っている。そして彼女の胸にも、俺が揉みしだいた指の跡が、薄紅色の花びらのように残っているはずだ。

「……フリーレン様たち、もう起きていらっしゃるかもしれません」

「そうだな。行こう」

部屋を出ようとドアノブに手をかけた時、フェルンが俺の袖を引いた。

「……待って」



「どうした？」

「……充電。……最後にもう一回」

彼女は背伸びをすると、俺の唇を奪った。チュツ、という軽い音ではない。舌をねじ込み、唾液を混ぜ合わせる、濃厚で粘着質なディープキス。数秒、いや数十秒。互いの息が続かなくなるまで、貪るように唇を合わせ続けた。

「……ふはっ。……ん、はぁ……」

唇を離すと、二人の間に銀色の糸が一本、とろりと垂れた。フェルンはそれを指で拭き取り、艶めかしい表情で舐め取った。

「……これで、今日の夜まで頑張れます」

彼女の瞳の奥には、消えることのない情欲の炎が揺らめいている。宿を出て、フリーレン

様たちと合流すれば、彼女はまた「お母さん」に戻るだろう。だが、そのロープの下にある柔らかな体も、内に秘めた激しい感情も、すべては俺だけのものだ。

「……行きましょう。私たちの旅へ」

フェルンが先に立ち、ドアを開ける。廊下から吹き込む風に、彼女の髪がふわりと舞い、甘い香りが鼻を掠めた。その香りは、昨夜の記憶を鮮烈に呼び起こす媚薬そのものだった。

いつもの旅路。けれど、昨日までとは決定的に違う世界。俺は彼女の背中を見つめながら、夜が来るのを今から待ち遠しく思っていた。

(完)

